

奇跡のなかに生かされる

川涯 利雄



『炉ばたセイ談』平成26年秋号に、自宅と職場の間を歩く往復二時間が至福の時間だと書いた。日ごと変化する道々の花、海に沈む太陽の荘厳な静けさ。昔の人々が四季を発見し、十二か月を発見し、二十四節季の暦を作り、七十二候の暦を作った時の感動に私も推参し、古人と一体になったような喜びを感じたのである。今はアキレス腱を痛めて歩けない。まことに残念。

私が感じた「至福」とは何だったろう。この幸福感はどこから来たものか。時が経つにつれて私に徐々に膨らみ、見えてくるものが

あった。

その頃、一つの小説に出会った。イタリアの作家サンナ・タマーロの『マッテオの家』という小説である。翻訳者の村野幸紀氏から直接、贈呈いただいた本である。すばらしい小説だった。

1 輝く命

一枚の草の葉も、星たちに劣らず仕事をしている。蟻も砂の粒も、ミソサザイの卵も同じような完璧な仕事をしている。アマガエルも至高の傑作。私の手はいかなる機械にもまさる。

全ては光る。鼠も蝶も草も光る。いろいろのものが光る。

何を見ても、新鮮な驚きを感じた。この中に「永遠」というものを感じた。

作家スザンナ・タモーロは自然のあらゆるものは貴重な存在価値を持ち、全てが輝いているという。この文章は神の創造に触れた主人公の驚きと感動を描いたものである。

主人公マッテオは妻と子供を一挙に失って暗黒の淵に投げ込まれた。妻が運転する車が海に飛び込んだのである。死因をめぐってさまざまな声や妄想に懊悩する日々が続く。

自殺説・他殺説・妻の背信説など様々な声が脳裏にまといつき、彼の心を切り刻む。

精神的荒惨の日々に堪えず、墮落の日々を過ごすマッテオに信仰深い盲目の父の言葉が働き掛ける。

マッテオは放浪の果てに出会った山小屋に籠り、羊を飼い、花々に囲まれた生活を送るなかで、草も木も花々もすべてが輝いていることを発見し、驚嘆する。自身の体も命も

見事な叡智・愛の中で生まれ、生かされていることを発見したのである。この喜びと感激が彼の闇に落ちたたましいを救った。

この時の感激を綴ったこの文章に触れたとき、私が往復二時間歩く中で毎日感じていた「至福」とはこれだったと思った。私は快哉を叫んだ。

2 生かされる

地球と太陽

地球と太陽の距離はまことに微妙、絶妙である。あと一步近づけば焦げ付き、もう一步遠ざかれば凍りつく。そのぎりぎりのところをやや楕円形の地球が24時間かけて自転し、明確な楕円を描きながら365日かけて太陽の周りを公転する。楕円を描いて公転するから春夏秋冬の四季があり、実りの秋も来る。

地球の中心軸はやや傾斜しながら自転し

ている。その傾斜によって、太陽光が地球の隅々に届き、人間や動物・植物、すべての命に太陽の恵みを分配できるのである。

地球自転のスピードはおよそ時速1700キロメートル。新幹線の約六倍から七倍の速さだが音もなく、揺れもなく、我々は振れ落とされることなく、七十数億の人間が地球の表層にそれぞれの形で暮らしている。みごとな地球の仕組みである。

海

この広大な宇宙のなかに何億あるかわからない星の中で、海をもつ星は今のところ地球だけだと学者はいう。この海水はどこからきたのか。

白く長い尾を引いて時々夜空を流れる彗星をわたしたちは知っている。あの彗星が何千万・何億個も地球に打ち込まれて海が出来たという説をNHK特集で聞いて驚いた。丁

寧な解説だったから、少なくとも海水の起源について、これが地学者・海洋学者たちの通説になっているのであろう。何万もの彗星を地球に打ち込む技を「偶然」と言えるだろうか？ 何か大いなるものの「意志」が働かなくては、そういうことは偶然には起きない。

また、この海水が面白い。1メートルの深さの海水は学校のプール何億個の水に相当するの？ 海洋学者は1年に1メートルの深さの海水が空に蒸発するという。蒸発した水は空中に漂い、冷気に触れて凝集して雲となり、さらに冷えると雨や雪となる。蒸発した海水は一滴余さずもとの海にもどり、一滴も地球外にこぼれない。見事な循環の叡智である。

空から降りそそぐ雨や雪は、山々の植物を育て、大地を潤し、人間の食糧となる稲や野菜を育て、心を癒す花々を育て、多くの動物

の飲み水として命を養う。

照葉樹林の落ち葉に降りそそぐ雨は小さな細菌を育み、細菌は落ち葉を蚕食、解体し、その植物の栄養分と菌は雨に流れて山川に注ぎ、菌は川の濁りを食して水を浄化し、菌は水苔をそだて、菌や水苔を食して鮎などの小魚が育ち、小魚めがけて鯉が急流をのぼり、多くの川の有機体を求めて海から魚群が川をさかのぼる。水は山や川の栄養と共に海に流れて海に栄養をもたらし、その栄養を求めて鯛や鰯が河口にひしめき、河口に人間が住み着いて、街は漁港としてにぎわったのである。

海水は龍のようになうねり、くねり、多くの壮大な海流となつて時に海面に出て酸素を取り込み、海底に潜つて海の生き物に酸素を与える。海流は四千年かけて世界中の海をめぐる海洋学者はいう。

山も海も一つの大きな循環の輪を描いて

つながっている。この壮大な循環の叡智のなかに私どもの命は生まれ、生かされているのである。

人体・命の仕組み・遺伝子などを研究している筑波大学の村上和夫教授は世界的な生命学者だが、人間が生命を得て、この世に生れ出る確率は、宝くじの特賞に連続百万回当たるよりも難しいという。何か、大いなる意志、サムシング・グレイトとでも呼ぶべき大いなる意志なくしては人間としてこの世に生まれ出ることはできない”という。

こうした大いなる意志に包まれて私どもは命を与えられ、生かされている。私は一日に時間の徒歩の中で、この貴重な命をいただいていること、貴重な自然の営みに囲まれて生かされていることを実感したのである。この時間の喜びを「至福」と呼んだのである。

3 表現ということ

先日、奄美に行った。一泊二日の出張であった。帰りの飛行機までの時間を利用して田中一村記念館に立ち寄った。この小一時間の時間が大きな感動をもたらした。

一村の筆は、すべて命がけで奄美の自然にこもる神の命を描いていた。大きなビロウの葉が発する命の呼吸を、繊細に、丁寧に、濃緑の筆で、あるいは黒い墨筆で、大きく強く、しかし、いかにもやさしく描いている。その線を見ていると、一村の呼吸や祈りが磁場のように響いてくる。こころを虚しくして、丹念に打ち込む表現者田中一村の魂が見たものは、物そのものに籠る創造者の意志である。その画をじいっと見つめていると、涙がにじんでくる。

表現とはまさにかくあるべしと思った。自然の作り出す生命の尊い営みに真向う時、表

現者は人生のすべてを捨ててその尊い命を写すことにすべての力を注ぐ。

こうして描かれたものが芸術の域に達するのだ。一村は全てを捨てて、裸一貫で自然にこもる命を写す。その時の直観の二首。

画布に海老あはれ触角のそよぐなり　もの
に至る目いのちを描く

削ぎ落し世俗のなべて削ぎおとし息のぎ
りぎりの命をゑがく　利雄

作家安倍竜太郎が画家長谷川等伯の生涯を描いた小説『等伯』上・下の中に、等伯が七尾の霧につつまれた松林の情景を描きながら、技、神(しん)に入るすさまじい体験をする場面がある。

まず等伯は、夜明けの寒さに堪えて水垢離

をし、座禅を組み、呼吸を整え、瞑想して心の鎮静を待つ。描きたいという欲さへ捨てて自分の内部に湧きくるものを待つ。

松林に宿る永遠の真・善・美。これをそのまま写す。松林に籠る御仏の息吹を画布に移す。そのことにすべての力を注ぐ。

こうして一気に筆を執った等伯は、うごめく霧に包まれて見え隠れする松林の風景を、自然の呼吸を、霧の動きを描きに描き、写しに写す。夢中で描いて三日三晩、ものに憑りつかれたように描いて等伯は倒れて、昏睡に陥る。

こうして四百年以上昔に描かれた等伯の国宝『松林図』は完成した。見る人をそのまま曼荼羅のなかに誘う力がおのづから籠る名画はこうして生まれたと作家安倍竜太郎は書く。

作家の想像力も筆も、まさに神に入ったと

いうべき見事な小説である。

私は短歌を創る。小さな日々の感情に埋没した歌をあくせくと詠むのはそろそろやめべきだと感じている。歌はもつと、命の輝きを、生きる喜びを、自然の美しさを・・・つまり、壮大な宇宙の営みに通うような深い呼吸と、そこに包まれて息づく命のよろこびを歌うべきではないかとこの頃考える。

(歌人、華短歌会前代表)



